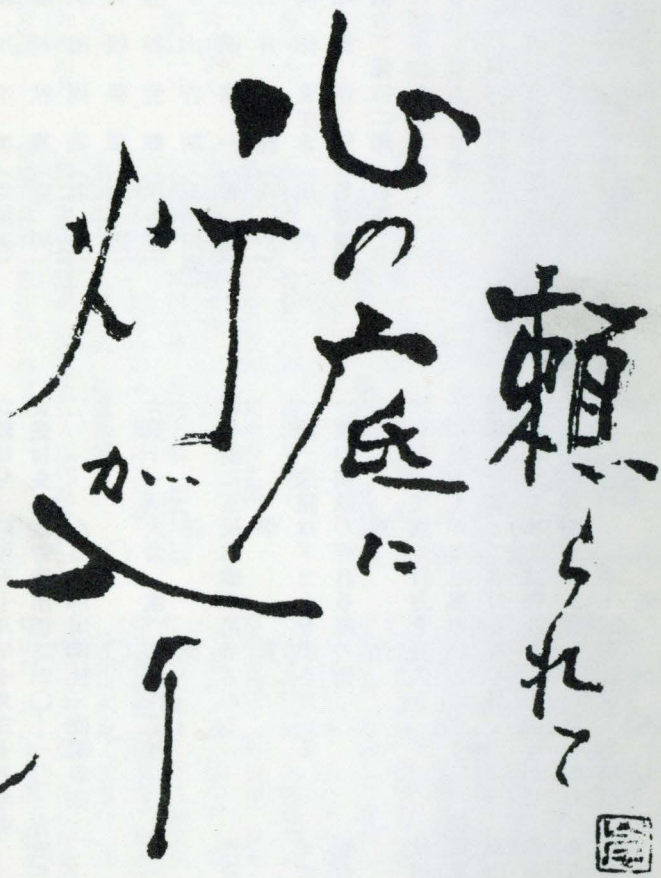
昭和52年5月23日第3種郵便物認可　昭和58年10月1日発行　毎月1回1日発行　通巻241号

かもしか



1983/9·10　かもしか川柳社

第十二回かもしか誌上全国川柳大会ごあんない

☆課題と選者

細川不凍（北海道）
藤村秋裸（盛岡）
須田尚美（羽生）
天根夢草（大阪）
酒谷愛郷（伊万里）
小山吉朗（五所川原）
三浦宗一（青森）
村井吉重（八戸）
高田寄生木（川内）
北野岸柳（名誉選）

火

☆出題　宮本めぐみ（仙台）保田二郎（石巻）

☆会費　九〇〇円（60円切手15枚可）
発表誌「かもしか」呈上します。

☆賞
正賞・五十嵐さか江賞（津軽塗楯）
準賞（津軽塗楯）共に入賞作品を刻んで贈呈いたします。
その他の優秀作品と、団体（得点第一位地域上位三人）にも呈賞します。

☆同点　先着者を優先します。

☆締切り　昭和五十八年十月三十日着便

☆送付先　030青森市佃二四〇—一〇　吉田ちか子方
かもしか川柳社・佃編集室

○　○　○

☆第十一回大会「風」入選作品抄

正賞　青森　岸柳
風の樹に五反六畝が吊るされる

準賞　米沢　沢心
一期一会風はドラマを書きたがる

秀逸　仙台　めぐみ
一枚の演歌が売れる風の街

秋田　京一
田を売って風の行方を見失う

相模原　マサ子
子に託すものなし風のひとにぎり

郡山　節子
残像を千切って逃げる風の耳

青森　光生
数珠にからまるは哭きたらぬ風ばかり

※太古の人が手でかこっていた火から、あなたの火へ

039—52青森県下北郡川内町浦町
主催　かもしか川柳社

第一回川柳Z賞発表

正賞（十万円・津軽塗楯）　北海道・当別町　細川不凍

準賞（一万円）　岡山市　行本みなみ

準賞（一万円）　高知県・土佐市　海地大破

準賞（一万円）　青森県・弘前市　工藤寿久

秀逸（図書券千円）　村上陽子　墨作二郎　細川聖夜　北野岸柳、細川不凍　神谷三八郎　吉田ちか子　墨作二郎　山本忠次郎　菊池俊太郎　。高田寄生木推せん　天根夢草　細川不凍　海地大破　墨作二郎　行本みなみ　柏葉みのる　藤井比呂夢　須田尚美　工藤寿久　佐藤岳俊

第一次選考経過（各選者十人以内推せん）
。宮本紗光推せん　須田尚美　海地大破　北野岸柳　片倉沢心　中村卓民　吉岡宵波　細川聖夜　渡辺一寸　山本忠次郎　神谷三八郎　。小野公樹推せん　細川聖夜　普川素床　村上陽子　井熊玲月　嘉瀬信柳詩　山本忠次郎　藤井比呂夢　。柏葉みのる推せん　天根夢草　野田伸吾　海地大破　北野岸柳　山岸竜清　中村土竜　村上陽子　吉岡宵波　菊池俊太郎　行本みなみ　。工藤寿久推せん　須田尚美　北野岸柳　山岸竜清　普川素床

第二次選考経過（各選者五人以内推せん）
☆橘高薫風（豊中市）推せん
①北野岸柳　②柏葉みのる　③行本みなみ　④山本忠次郎　⑤海地大破
☆時実新子（姫路市）推せん
①工藤寿久　②天根夢草　③細川不凍　④菊池俊太郎　⑤佐藤岳俊
☆岸本吟一（茅ケ崎市）推せん
①海地大破　②工藤寿久　③村上陽子　④佐藤岳俊　⑤墨作二郎
☆寺尾俊平（岡山市）推せん
①細川聖夜　②行本みなみ　③村上陽子　④山岸竜清　⑤天根夢草
☆尾藤三柳（東京都）推せん
①細川不凍　②菊池俊太郎　③神谷三八郎　④普川素床　⑤墨作二郎
☆泉淳夫（福岡市）推せん
①細川不凍　②行本みなみ　③工藤寿久　④墨作二郎　⑤佐藤理川
☆奥室数市（町田市）推せん
①細川不凍　②中村土龍　③海地大破　④普川素床　⑤工藤寿久
☆片柳哲郎（横浜市）推せん
①細川不凍　②墨作二郎　③吉田ちか子　④山本忠次郎　⑤山岸竜清
☆山村　祐（東京都）推せん
①海地大破　②行本みなみ　③普川素床　⑤村上陽子　⑤細川聖夜
☆杉野草兵（青森県）推せん
①細川不凍　②行本みなみ　③村上陽子　④工藤寿久

川柳Z賞選考委員会

第一回川柳Z賞・正賞

作品五十句

北海道石狩郡当別町白樺
細川不凍

流氷接岸　心カタカナにして臥す
神と交わる母をみている長い冬
生き継いで濁音ばかり吐く枕
ごろりと芋ごろりとお前の冬がある
極刑のその日も還るブーメラン
研ぎ水の行方を母に問うてみよ
脳天に寒が居座る日の破礼句
雪七日　音を無くしている楽器
せめて一通　冬の肋を抜けてゆけ
生かされて生きる卵を飲み下す
切っ尖は泥濘の中　惰眠する
かげろうや　かたちばかりの握手して
生きものの貌して病褥這い出しぬ
北の門出て雌となれ雄となれ
芋虫の夜とて熱き身振り欲し
身のうちに亡父の席置く花見かな
うつつとも母が異端の水を口に
埋れ木が声を発したむらさきよ
身より恥零しつ河の流れ追う
蝶に骨あれば眠れる男かな
春本や吾れに乾涸びたる揚羽
母にまだ登る木がある朝ぼらけ
青嵐　弾道にいる父ら母ら
一弾もなく花園に入る勿れ
桃の雨　濡れそぼつのは父の骨
女ゆえの弾痕さらし紙ふぶき
けもの臭き玉転がしはあの世まで
炎天に母置き破れかぶれかな
八月の風と病みいる手風琴
抱擁のあとの焦土を神とあるく
旱天の頭叩けばこぼれる念仏
人買いが携えて来た星の数々
安心立命いつまで渇く亀の首
呼応して鴉生まれる地にまみれ

●昭和41年、川柳入門。
●昭和44年、「さっぽろ」同人「こなゆき」同人
●昭和45年、「ますかっと」同人「ジャーナル」社人。工都叢書刊行会より句集「青い実」発刊。
●現在、「道産子」同人「展望」会員。

おちびとのふぐり鳴らして風凪ぬ
一縷のえにしより聴えきし神楽
休止符をいくつも母からもらう秋
残月を生木に吊るす母でよし
向日葵の首は折れたる夜のサーカス
北からの風の間にまに契らんか
この世仮の世わがはらわたを経流る
十月の藁人形が身籠りぬ
きょうの空きょうにも滅ぶ巣のありて
蝶死んでわが眼球におさまりぬ
てのひらで隠せる月よ父の忌来る
掌を合わすとひとり如実に一人
ゆで卵ツルリと剥けて父の忌過ぐ
地球儀を回す力は残っている
錠剤ゴクリと眠りにつく山河
さらば夕の木喪明けの馬が待っている

第一回川柳Z賞・準賞①

猫属人間抄

岡山市清輝橋二—一—九
行本みなみ

相討ちの手足を抱いて春に入る
いろいろの虫が這いでる　姉の道
貧しさで描いたような馬が居る
花奠座を濡らし瑞々しい死体
雛の部屋　疵をいじめて咲く少女
寄ってたかって花に沈める　姉の髪
咽喉を突く膝に折り敷く　彼岸花
踏切りに鶏頭のあり　忘れねば
シャボン玉　一つの顔がくだけ散る
花弁を吹いては探がす　姉の骨
みな哭いているぞと草が生えてくる
そのあとの水にあぶくの一つ三つ
川音の近くで死後も始まるか
人ひとり融けた水なら　これくらい
雨は黙　女は黙の呪符を貼る
傘を持たすと弱いところが見えてくる
墓の前　きれいな蛇とすれちがい
ある傘に居てある時は手を濡らす
したたかな猫だ　うどんを喰っている
生きざまの透く窓ガラス痛くなる
不知火をお前と呼んで夜が更ける
垂直に卵串刺し　裏切るか
地蔵さんを描きに出た子が帰らない
また処刑されたところで眼を覚す
昏い昏いと眼玉を一つずつ洗う
少し不安で卵の殻を割ってみる
約束を果した斧が横になる
一夜あけてもお前の首は美しい
白という不思議な彩に着更えさせ
駈けこんだ影有耶無耶にしてかえす
鴉来て姉の揺れるを見てかえる
後朝や　言葉ひとつで了る人
猫が死にましたと男ポソリと言う
買ってきた赤飯喰べて一人で哭いた

川柳歴

●昭和四十六年　ますかっと川柳社入会
●昭和四十八年　ますかっと川柳社同人
●昭和五十年　川柳展望　会員
●昭和五十五年　ふあうすと川柳社同人

○　○　○

空瓶を洗い吾子に血を遺す
死にたくてマッチを擦ってばかりいる
二の太刀がおちるあたりへ押してやる
絨氈に素足ひらりと蛇になる
死後快晴を信じ二人の足袋はだし
鬼灯は一寸先の闇が好き
義母よりも温い牝馬の目鼻立ち
西高東低　のどを切られたように哭く
美しく縊死の女を描きあげる
手袋をきっちりはめて釘を打つ
百斬って百を忘れる重い斧
かかわれば雪がたちまち泥になり
姉弟の顔で歩けば雪が降る
雪女郎しどろもどろの生年月日
約束の雪を降らせる　私の忌日
またの名は雪という死の降りつもる

第一回川柳Z賞・準賞②

作品五十句

高知県土佐市高岡町犬の場
海地大破

ふるさとの樹に一族はひざまずく
つながれている一本の樹の暗示
いっぽんの木の魂を吐き尽くす
花びらがひらひら舞う木の情け
いっぽんの木を欺いて嫁に行く
縄電車走り続けて父になる
石けりの石の中までさびしい父
みぞおちにすとんと落ちる父の戯画
立ちあがる痛みに父の影がある
父の蹄はどこまで続く川明かり
木を倒し火宅の父を見届けた
むこう岸を歩いていた父の傘
秋のランプは神を点して病母泣かす
病母の爪黙って剪んで片付ける
ははの痛みで朱の椀を地に伏せる
朱の椀のなかでしなびる母の村
亡母を想うとたちまち割れる夜の爪
駅の灯にはずみをつける父と母
ちちははを棄てる遊びの雪うさぎ
皿割れて身の内ばかり風が吹く
連れ添うて皿の白さのうとましき
ひとつずつ小石を捨てる乳母車
野の沖をゆっくりと行く乳母車
形見分け毬はひっそり息をのむ
田舎饅頭ゆったりと生家を食べる
鉦や太鼓で婆は地獄を見てきたか
秋が来て尖るばかりの蟻の列
鳥は木にわれは旅人せかせるな
珈琲館の椅子に漂着するラグダ
鬼か仏かこおろぎが鳴いている
溺死体を担ぐくらげの祭りかな
鶏の首はね一念の血を濃くす
無賃乗車のあと珈琲をあつくする
てのひらの種は吃ってばかりいる

●昭和29年12月　川柳入門（入江川柳会・高新柳壇・川柳帆傘等へ投句）
●昭和40年2月　ふあうすと川柳社同人
●昭和50年2月　川柳展望会員
●昭和52年7月　西森青雨遺句集「旅の酒徒」編集発行
●昭和54年7月　木馬ぐるーぷ結成

あたまのなかの駅を燃やして逃亡す
ほろびの彩をじっと見ている埴輪の目
喉が灼けると橋を渡ってからおもう
雲を見る足の鎖をほどかずに
止り木に鱗を一つ置いてくる
少年老いてけん玉遊び続くなり
少年のことばをつなぐ長い塀
泣いて笑って軒に吊るした唐辛子
はらわたで拍子木が鳴るさむい一日
ドラム罐がんがん叩く冬の海
絶望の月がはらわたからのぼる
胃袋のなかで砥石が目を覚ます
さらさらと砂の音するあばら骨
寒さむと鱗を洗う影法師
死ぬときの枕をひとつとっておく
とても真面目に詐欺師の墓と書いてやる

第一回川柳Z賞・準賞③

雪のしがらみ

青森県弘前市和徳町二三二
工藤寿久

麦を踏むこの子もやがて麦ならん
他人の死は些細なことよ津軽　冬
凩に　しまって置いたははを煮る
北からの刃物はどっと袈裟がけよ
にわか雪　どこへも行かぬ髭を剃る
逃げ道を北へ北へと掃いておく
雪の偉よ　あすは圧死もありぬべし
懺悔する語尾を吹雪に盗まれる
葱を切る葱より淋しよ　冬一日
ひび割れの餅と心中したくなる
うろたえて鉤裂きばかり津軽冬
救命具売りに出てゆく雪だらけ
雪沓を首まで履くと　やや眠れ
死に上手　白き冷たき日を選ぶ
子ばなれの考え尽きし雪女
かじかんだ掌を見ておれば蟹が這う
鼓膜ぶち抜いたは　涙かすが漏りか
頬かむりして鍵盤の雪を掻く
両の掌で子を抱くさまにして樹氷
凍み豆腐　別れ話が好きになる
人を焼く煙をボーッと盗み　冬
雪に寝て起きては遺書を書くポーズ
雪折れの腕を小抱きに安楽死
剥製のちちを見ておる掘り炬燵
遠い町のチラシ見ておる雪催
雪藪に恥骨を探す　朝昼晩
親指の打撲ひりひり氷点下
真冬日よ　死者の二人は動かない
南無南無と海より戻るトウシューズ
雪灼けの目で怖ろしき縄拾う
焼きリンゴ　ちちの柩に雪しまき
狩人が去った雪より血を拾う
寒立馬もどき　しきりに涙嗅ぐ
雪牢へ戻る真面目な死刑囚

●昭和三十五年　弘前川柳社主幹宮本紗光氏に師事、川柳を学ぶ
●昭和三十八年　弘前川柳社同人
●昭和三十九年　かもしか誌に投稿開始
●昭和四十一年　青森県川柳社同人
●昭和四十五年　かもしか川柳社同幹事
●昭和五十七年　第10回県文芸新人賞

祈る掌にこれはきびしき薄氷
義姉義妹ころせころせと雪風
林檎樹の芯に凍てつくほとけたち
密漁の鮭も男も雪を哭く
縛につけ縛につけとは冬海鳴り
洗い髪　即座に氷るは非人道
雪にひしがれて男根彫りもなし
北窓に出入り繁きはちちなるや
雪のんの　掌に重力のない目玉
雪中の劇演ずるは風船屋
太ももに残る泥まで雪が波
雪に掌をついたは神を招ぶ仕草
真冬日よ箸を兇器と見間違う
不稔症の指見ておれば更に冬
流人の血継ぎしを哭くかはまなすよ
売る鱈の布団ともせよ雪に慈悲

選後感　橘高薫風

川柳Ｚ賞第二次選考の作品が到着した。充実した句集もあれば、五十句だけのもあって言うなれば重量の階級なしで取り組む試合と同じで、おのずからなるハンデが感じられた。

これは規定に準じたこと故、斟酌すべきことではなかろうが気になったことである。

第一位は、北野岸柳氏の句集「男の紙芝居」で、これは、Ｚ賞のために出版したとも思えるほど、この賞にふさわしい対称だった。

巻頭の、

風の樹に五反六畝が吊るされる

をはじめ、

寒立馬ただ北へ向く性である
花笠は発狂すべき北の夏
先の世は役人だった蟹の泡
バス停の時刻どおりに友が死に
日の丸のなんとやさしい嘘だろう
肩車父より高い山を見ろ
旅の酒ジキルの酒を追加する

風土性もあり、川柳の面目とする偕謔に豊み、遊び心も適当にまじえ、新しい道を拓く旗手たらん気概と技術が調和している。上滑りをした句も多いが、それは、どの作者にも言えることで、それも上等の作品を得ることへの踏み台になっていることを思えば、賞に該当する第一の作と審査した。

第二位は、柏葉みのる氏。

川柳は詩でありまた常識であり、仲々幅の広いものがある。その調和をとりながら視野広くまとめる手腕は並の作家ではない。

十二月八日の冷めたスープ皿
歩行者天国政治の流れ替えられぬ

第三位は、行本みなみ氏の猫属人間抄

これは、表題が適当ではない様に感じた。

貧しさで描いたような馬が居る
したたかな猫だうどんを喰っている

マイナス点法で第二位との差が出来た。

第四位は、山本忠次郎氏。

軍隊が来て蝋燭を消して行く
液体になれば矢張り女なり

私は、阿部井蛙の俳句が好きで、自分には詠めぬこの様な作品にあこがれを持つ。

第五位は、海地大破氏。

溺死体を担ぐくらげの祭りかな
雲を見る足の鎖をほどかずに

次点だが工藤寿久氏の風土性に注目した。

Ｚ賞選考を終えて　時実新子

他人と自分とあの世とこの世と都会と田舎と硬派と軟派と重と軽と鋭角と鈍角と抽象と具象と――いろいろと川柳、なのである。

第一次予選を経た二十数人の作家と対で向きあっていて、一番むなしいのは何かを考えていた。そして常識と概念につき当たった。

さすがにイコール川柳は少なかったが言葉で遊んでいるものは多かった。申し分なくうまいのだが、そうした句は読み手の心を素通りして何も残さない。かと思うと一途な訴えと見える作品群に出会ってこちらも一心に聞こうとするのだが「しっかりせよ」と抱き起こすのがやっとのことで、それらは濡れた感情から一歩も出ようとしない。

川柳とは何だろうかと改めて考えた。現代一般が求めるそれを探りながら、極めていけば作者対私の闘いが先ずあって、しかるのちに人間としての共鳴が響き合うもの。それを私の選考の基準として拝見した次第である。

▼一席　工藤寿久『雪のしがらみ』

雪灼けの目で怖ろしき縄拾う
真冬日よ箸を兇器と見間違う

選後感　泉淳夫

初めてのＺ賞作品であり、五十句競作であって、柳界に曾てない快挙であると思うことからも選考に当っての心構えが要求された。

当初、十二人の作家を抜きながら、五人に絞る繰返しの中で、私なりの目標を定めた。それは類型化の目に余る昨今。個性を求め続けている作家を選ぶことであり、その創作精神を見詰めることであった。

最終結果は、細川不凍氏を一位に、行本みなみ、工藤寿久、墨作二郎、山岸竜清の各氏を順に選んだが、順位づけの苦しさは数日続いた。

細川不凍氏には、群作を通じて氏が紛れもない詩人であることの確証を得たことが嬉しかった。

作品は清冽な詩心が、生と死の界に凛とした抒情を展げていた。

行本みなみ氏については志向途上にある予感予兆の作品構成に、何故ともなく河原枇杷男を感じたが、作品自体に借りものの翳はなかった。

呪術的、妖気的、作品を書くことでは柳界に数少ない作家であって注目している。

工藤寿久氏は、何よりも強い土俗性が作品を重厚にしていて、それに北辺の雪という絶対のものが扱われていた。

ただ素材の雪が纏うている象徴性からの優位さが感じられて三位に据えた。

墨作二郎氏は、作家としての経歴から云っても、作品の完成度から云っても、此処に置く人ではないが、五十句競作に核を求めたいと希った私には、巧緻と多彩さに「伊予路」の芯を捉えかねた。

山岸竜清氏には、提出の「放物線」に、未完成の分野が見受けられるものの、清新な韻律に惹かれるものがあった。

特に類型化の甚だしい関西にあって、独り個を貫いていられる若さに大いに今後を期待している。

作家ごとの佳句を書き止め得なかったが、選考過程でチェックした佳品は、作家それぞれに脳裏に止めている。

数句のトラブルはどの作者にもあるが、工藤氏の一貫した姿勢に気負いがなく、しかも自己の他人視が確立している点を推す。

▼二席　天根夢草『箱かぼちゃ』

遠くまで行って戻った一輪車
らんらんとかがやく酸素吸入器

人口に膾炙されることは短詩型の一つの義務ですらある。時空世界に残る川柳。

▼三席　細川不凍『作品50句』

きょうの空きょうにも滅ぶ巣のありて
てのひらで隠せる月よ父の忌来る

境涯を脱けようとする作者の平常心に、エロスの仄見はよろこばしいことであった。

▼四席　菊池俊太郎

雷鳴の中のファミリーコンサート
雪止んでしどろもどろの教戒師

似た作品作者の中で菊池氏の社会批評はそのあそびのこころが却って対象に鋭く迫る。

▼五席　佐藤岳俊『作品』

麦の芽にかくれてすすむ蟻の列
彼岸花いっぽん飢えの血がはじけ

事実報告に息づまる一本気の中に、わずかに拾えたこれらの句は佐藤氏の幅を見せた。

選後感　寺尾俊平

川柳Z賞候補作品を全部若干のもどかしさを感じつつも終了した。

全体の印象を申しあげると、句のうまさというか、表現のたくみさについては、まあまあ、文句のつけようのない作品ばかりであった気がする。しかるに、選後のいま、胸の中で炎えるようなものがない。冒頭に申しあげた若干のもどかしさというのは、この点ではないかと思う。

最近の川柳界の作品風潮は「まあまあ、このぐらいのところが玄人スジにうけるんじゃないか」という気持がよく判るものが多くなっている。つまり、作家の甘えのようなものが作家尊重の川柳界の中でハバをきかせているということもいえるのではないだろうか。

私が今回期待したものは、もう少し図々しくて、野放図で何かが匂うもの、そして、一貫した思想というものがはっきりしたものであったわけであるけれども。

川柳Z賞という勇気ある行動に、作家諸君の作品が果して応えられたかどうか、なにごとも第一回というのは、未知数なものが私たちを楽しませてくれるものだが。

。細川聖夜君

。手を振ってこの子もいつか捨てる村

よくまとまった作風であって、堅実な作品群であった。

行本みなみ君

。花莫蓙を濡らし瑞々しい死体

作品の中に冷たい死への疑問がにじみ出しているのがよい。

村上陽子さん

。童話の好きな男とねむる冬が来る

激しいものではないが、女性の匂いがしている。女らしい女がいない昨今なんでね。

山岸竜清君

。ぞろぞろと鴨消息にうすい河

硬質な表現であって、作品の構図の荒さが逆に効果的である。

天根夢草君

。この箱はかぼちゃの種を入れる箱

弾力のある作品である。自分で自分の思ったことを句にすることはむつかしい。

。

と、いうわけでありました。

概評　尾藤三柳

第一次銓衡を経た27点は、現代川柳のさまざまなクレーターを俯瞰する趣があった。作家ひとりひとりが、すぐれたイメージの猟人であり、敏捷なスパニエルであってみれば、これら作品群に価値的なパースペクティヴを求めることは、なかなかに至難である。

何よりもまず気がつくのは、どの作品も極めて語り上手であること。時に、語り上手であり過ぎることも、現代川柳の一面での特徴であろうが、語り上手の多元空間が必ずしもサチュレーション・ヴァリューと親密でないことは、日常的な饒舌の中でもしばしば経験するように、コトバの感化的価値に多く依存する詩にとって、それは長所であるよりむしろ弱点ともなりかねない。

さて、一作家五〇章の作品世界は、独立した個体と、それら相互が交響する集合体としての二元性を持っており、このことは、単独作品として取り出された場合には捉えきれない一章の力学的位相を全体の中で際立たせ、その個別的はたらきのプラス・マイナスを相対的に測定させてくれもする。

私の見るかぎり、五〇章の作品世界に殆ど破綻（マイナス作品）を見せなかったのが、細川不凍氏（北海道）であった。

多彩とか絢爛とかいう形容とは対極をなす個々の作品は、比較的固定された位置に、ただ一台のカメラを据え、自己の内面から徐々に盛り上がる情動をぎりぎりの瞬間まで抑えてシャッターを切ったという印象で、その影像は的確なフレーミングと構図とから成る。語り上手ではあるが、饒舌では決してない。

あえて破綻を指摘するなら、無邪気な思いつきとも推察される「ごろりと芋」のパロディ志向、噛み当てた砂のような「極刑の」のステレオタイプ、「休止符を」の信じがたいタルミなどだが、全体としての作品世界を損うほどのマイナス因子とはなっていない。

細川氏を一位に推すゆえんである。

二、三位の菊池俊太郎氏（東京）と神谷三八郎氏（愛知）は、前者の未完成、後者の完成という作家的行程のちがいはあるが、それぞれの得がたい個性と作品の独自性を評価したい。四位の普川素床氏（千葉）には真の意味でのユニークさがある。五位の墨作二郎氏（愛媛）には連作的な単章の弱さがあった。

選後感　岸本吟一

総じて、高いレベルの応募作品がそろっていた。全国的な規模で参加をみたことと、一つの結社に、偏していないことが、好結果を招いていると思えた。結社のありかたに一つの示唆を与えているという点も附随して考えさえられたことであった。

○

第一位・海地大破氏

一連の作品は、「血縁」に対する想いで貫かれている。

——むこうの岸を歩いていった父の傘

——ひとつずつ小石を捨てる乳母車

——鶏の首はね一念の血を濃くす

「人情」という角度とは自ら異った、相当な深度をもった作品群をみた。

第二位・工藤寿久氏

砂漠を傍観するものと、砂漠の中に生活するものとの「砂漠感」が、当然異なるように、雪の中に生きる生活から生れた「雪のしがらみ」である。

——逃げ道を北へ北へと掃いておく

——両の手で子を抱くさまにして樹氷

第三位・村上陽子氏

男と女の世界に深く踏み込んだ作品群である。

——ポチを裏切るさむい男を見てしまう。

——さくらさくらだましおせぬままさくら

——終着駅で男に渡すかぎがある

この世界は、より女性に道をゆずらねばならない。

第四位・佐藤岳俊氏

「土」のいのちへの賛歌。

——立ち枯れの田よいちめんの星ひろがる

——終焉の地へ種を蒔く父の影

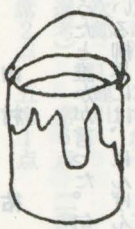
五十句の中に最も佳作数の多い作家であった。

第五位・墨作二郎氏

自分の作品の世界を、すでに完成している。力のある作家である。「孤独」との斗いを詠いあげている。

——鴉あそぶ鳴呼と完住なき吾れに

——桟橋のわが眼に映る古タイヤ



「事」をみること　奥室数市

二次選考作品について全体に言えることは抒情作品が多いことである。短歌的湿っぽい作品が目立ち、一見乾いた作品もよく見ると語彙だけが乾いていて、作品の底を流れるものは甘い抒情。個人の周辺のみを大事がる作品が多い様に見受けられた。たしかに近来は向ってゆく対象が見当らず（見つけようとしない）戦后、対象をハッキリとらえ乍ら、自分の中で咀嚼し、そして相手に向って吐き返していた粗雑さの中にも力強い作品があったのにくらべ最近は対象（事）を割合素直に受け止め、個人の中に情況を沈澱するだけという傾向は、社会の中の個を考える上で問題にないそうです。そんな中で……

☆不凍作品—個人の中へ没入せず、己を突き離して、自身を「事」として捉えている点に好感をもった。50句の連作の流れも十分に計算されているように見受けられた。難を言えば、付合いの妙は平板で直線的であることと読者の普遍性にどこかで頼っている点が気になったが、技巧は流石であるし、何よりも、頑固に自身を見つめつづける姿勢をとる。

選後感　片柳哲郎

このＺ賞選考に際して僕が求めたものは、作家としての「いのちをこめた作品」であった。生命のいずみから咲きひらいた作品を僕は期待した。従って作者不在に価する句の羅列には興味がない。50句発表とは一作家に与えられた花の舞台なのだ。その舞台に自己と終始し得ない句の一連が如何に貧しいものであるかを改めて僕は知った。

細川不凍さんの50句を読んで「徒然草」の中の一節〝世は定めなきこそいみじけれ〟を想いおこした。この作家の良さは、空間とのリアリティの試みが見事なことである。従って展開性が拡く、美しい。美しさを否定し、殊さらに泥まみれになって絶叫する作家もいるし、奇怪な表現で自慰を行なう人もいる。否定はしないが究極における短詩性に鑑賞者が求めるものは、美しい生命の樹なのだと僕は思う。そんな点で不凍さんの一連には一種の凄絶の気で貫き通した異形の魅力を見た。

墨　作二郎の「伊予路」は珍らしく平易な表現で的確な描写をした。〝鴉あそぶ〟〝道化師の妻〟〝駱駝の地図〟など例によって言葉の遊びもあったが、それらを消して一条の初老孤独の生活が浮び納得させた。彼は自分の血の中にたったひとりで還って行った。そんな思いがした。

吉田ちか子さんの作品は〝想い〟の充実がある。そして一句一句に物語り性を秘めている。一瞬開き、一瞬にして消える花火のような句が縦横に交叉する昨今、〝己れ〟を忘れず瀟々として流れる女の中のつよい思惟が見える。しかもその思惟が汚れていないし、上手さを押えようとする努力が見える。だから句が落ちついており読みおえて鑑賞者にも解決できぬ言葉を超えたある高揚なものを見た。

山本忠次郎氏の一連はみんな軽い。重量感とはおよそ縁のない句であるが発想は面白い。

山岸竜清氏の「放物線」を読んで達者な句を作る人だと思った。読ませる句を作る人だと思った。句に充実したものは少いが上手にまとめていた。

その他、嘉瀬信柳詩、野田伸吾、行本みなみ氏らの作品には心搏つものがあったが、否定したい句も多く、一作家の顕彰としては躊躇するものとなった。

寸感　山村祐

川柳はにんげんのうたと誰かが言った。句会中心に運営されている柳界には、にんげんのこころの切り口を見せた句は溢れていても、じぶんのテーマを据えた作品群はすくない。だから句がどうしても断片的になりがちだ。テーマを据えるとは、素材主義とは違う。見せかけの大作主義でもない。素材を透して、にんげんの生を巨視的に追究し、うたいあげることだ。

Ｚ賞設定の目標にそうした意図も含まれていると、私は解したい。

海地大破氏の五〇句には、じぶんのこころの生きざまがみごとに描かれていて、にんげんの生の喩となり得ている。句の背後に一族の生も投影され、主観と客観との微妙な交錯が味わいを深くしている。

行本みなみ氏にもじぶんのテーマへの追究がみられる。

普川素床氏の意外性豊かな句は、近頃流行のハッタリ川柳ではない。彼自身の影がある。こころの深層から、ポカッと浮きあがってくることころの泡だちであろう。

村上陽子、細川聖夜両氏の今後を期待したい。じぶんのなかから掘り起してゆくものをまだ豊かに残している作家と思う。

Ｚ賞設定の目標に、中堅作家賞的性格のあることも秘かに期待している。円熟の作家はもちろん貴重だが、知名度の高い作家は作品を世に問う機会に恵まれているのだから。

句が断片的に詠い捨てられる柳界へ、Ｚ賞の影響が深められ広められるならば、存在価値の大きな賞としての輝きを増してゆくことを私は確信している。

○　○　○

☆集計のあとに

33不凍（正賞）　19みなみ　18大破　16寿久（準賞）　10陽子　8作二郎　7聖夜　6岸柳（秀逸）　5素床　5夢草　5俊太郎　4みのる　4土龍　3竜清　3ちか子　3三八郎　3岳俊　2忠次郎　1理川

☆採点方法（第二次選考）　一席6点　二席4点　三席3点　四席2点　五席1点

☆土龍作品—不凍作品よりも付合いの妙は曲線的で面白い。が作品全体に俳諧的風景の濃さが目立ち作者の影がその濃さに負けようとしている点が気になった。

☆大破作品—「木」「父」「母」とつづく一連は常識的観念の城を出ないが、中盤よりの発想の自由を得てからの句に興味を覚えた。

☆素床作品—素床の自由定型があり、伸びのびと作句を楽しんでいる。素床落語の世界は今川柳に忘れ去られている諷刺のあり様を受つないでくれるひとりとして見てゆきたい。

☆寿久作品—「川柳に残されたものはあとは風土性だけ」という答の中で岳俊作品と共に風土性を伝えている。風物川柳に墜ちていない点を見つめる。

他に夢草作品（超俗希求が気になる）忠次郎、俊太郎、竜清作品（他人と一緒に自身を見ている作品散見。）作二郎作品（詩のことばの団塊を動かすと前章、後章たちどころに世界が変る面白さはあるが……）みなみ作品（淡々として無理をしない詩の作法は今後に期待するとしても、今すこし大きな周辺を画いて欲しい）

以上、私自身にも言えることとして。

選後感

杉野草兵

どうしても棄て切れない。細川聖夜、山本忠次郎・行本みなみ・工藤寿久・村上陽子・海地大破・墨作二郎・野田伸吾・佐藤岳俊・細川不凍・石田寿子・菊池俊太郎・中村土龍・吉田ちか子・片倉沢心。

生きざまそのままの血が音をたてている作品。伝統の良さを、五十句全体に光らせている作家。短詩の天才だとしか思えない人。櫛の匂いが、脈打っている人。えらいことになったと思う。秀れた作品とは、どんなことだろう、と迷いが出てくる。

行本みなみ・海地大破・墨作二郎・工藤寿久・細川不凍・村上陽子の六名にしぼる。

① 細川不凍
② 行本みなみ
③ 村上陽子
④ 工藤寿久

○　○　○　○

☆都道府県別参加者数

▽北海道5▽青森12▽岩手2▽山形2▽宮城3▽福島3▽茨城1▽埼玉3▽千葉6▽東京3▽神奈川2▽愛知4▽三重2▽新潟1▽長野2▽富山1▽石川1▽大阪4▽岡山9▽広島2▽山口1▽愛媛2▽高知4▽福岡1▽大分○▽熊本2▽ブラジル1▽計84人

○　○　○

事務局のデスク

・準備不足のままのスタートであったが、第一次選考委員五氏、第二次選考委員十氏のご協力により、ゴールに辿りつくことができましたことを厚くお礼を申し上げます。

・第一回川柳Z賞の案内の誌上掲載を各誌にお願いしたときは、Z賞締切り日に近かったので、割付け変更などのご手数をして下さった各誌編集者にお礼を申し上げます。

・募集期間が短かったので、参加者が極端に少いのではないかと危惧したのであるが、北海道から熊本まで、そして、ブラジルからの実力派八十人が作品を寄せて下さった。

・第一次選考を通過したのは二七人。三選者推せん四人。二選者推せん十二人。一選者推せん十一人の内訳だった。

・第一回の栄冠は、北海道の細川不凍さんの頭上に輝いた。おめでとうございます。

・第二回も全国各地の柳人、特に若手のご参加を期待しております。（寄生木）

準賞受賞

工藤寿久

不肖の五十句が「Z賞」入賞、まさか、そんな二・三日でした。

要項に従い憶面もなく応募したのは、第一次選考員に不肖の名もあった事と、応募作品と愚作とを比較し、だいたいの位置を測定しておくのも一考と思ったからでした。また不肖が幹事に推されております「かもしか」が思う様に応募作品が集まらなかったら?との危惧からで、入賞を狙うなど不届きな野心は全くございませんでしたのです。

それが不肖の句が入賞とのありがたい連絡が参り耳を疑っても見ましたのです。

「雪のしがらみ」五十句を読み返します時、何たる理念の乏しき句ばかりよと恥入って居る次第です。

それにつけても不肖の句に光明をお与え下さいました諸先生に低頭感謝申し上げますと共に今回の栄誉を以後の鞭ともとらえ、益々精進致します事をお約束申し上げお礼の言葉と致し度いと存じます。

本当に感激でございます。

Z賞を受賞して（正賞受賞）

細川不凍

Z賞の選者陣を一目見て、その錚錚たるメンバーに、一種の戦慄と武者震いのようなものが身を走った。先ずは参加することに意義ありと歓びいさんで応募した50句、そしてせめても二次選に進んでくれればと願っていた50句、それが海峡を越えて受賞通知が舞い込んで来たのであるから、天にも昇らんばかりの感激であった。

僕の作品は、よく暗いと言われる。その暗さは、僕自身のこれまでの経験なり体験なりが作句意識に強く影響を及ぼしているためもあるが、北方に住む者の血の成せる業も大なり小なり作品に微妙に翳りを与えていると思っている。という訳でもないが、作品50句は、自意識と北方意識との拘り合いから生じる抒情意識の作品を中心に、季節の流れにそって揃えてみたものです。

18歳で川柳を始めて現在35歳、青年から中年にさしかかっている僕には、このZ賞の受賞は一つの分岐点に見え、また今後への飛躍台にも見えてくるのである。作品の深化を求めて、一生懸命飛んでみたいと思う。

準賞受賞

行本みなみ

「川柳とは…」などと、小理屈を並べても、句会には滅多に出席しようとはせず、およそ、賞なんてものには縁のない者が、遠い、遠い「下北」の川柳Z賞に応募していたと聞いて、友人達は、どうした風の吹き廻しなのだと、おどろいていました。

そして、も一度、驚いてくれるでしょう。その顔、顔を想像しながら、ニヤニヤしております。

賞に入れていただいた嬉しさは、勿論ですが、これを機会に、まだ、お眼にかかったことのない、北の国の方々と、考えを述べあったり、悪口を言いあえる仲になれたら、良いだろうなーって考えています。

これからも、北で生れた川柳を、もっと、もっと読ませて下さい。そして、どうか、南で生れるだろう川柳を見てやって下さい。

ほんとうに、ありがとう。

○　○　○

第二回川柳Z賞の予告は、表紙三に掲載しておりますのでご覧ください。「北貌集」は休載します。（編集室）

準賞受賞

海地大破

鬱々とした日、Z賞準賞の通知をいただいた。七月十日、脳血栓を発病し、生死の境をさまよってきた私は、自作に対して懐疑的になっていたので、受賞を聞いても、さほどの感慨も湧かなかった。審査員には誠に申し訳ないことである。

私は今、川柳という形式の中で、如何に自分のことばで自分のおもいを昇華さすことができたかに主眼を置くとき、何とも心もとない思いにかられているのである。

作品は、その総質量において評価されるべきものであって、賞はその一過程であると位置付けている私は、賞をばねとして、さらにおもいの深化をはかり、類型化の排除をめざしていきたいと考えている。

私における作句活動は、自分との格闘であり、それをのり超えたとき、はじめて進むべき道がみえてくるのではないかと或る期待に胸を膨らましている。

ともあれ、私はこれまで気ままに作句し、発表し続けてきた。これからも、この姿勢は変わることがないであろう。ありがとう。

昭和52年5月23日第3種郵便物認可　昭和58年11月1日発行　毎月1回1日発行　通巻242号

かもしか

いつか去る椅子の汚れを拭いておく

雪魚

1983/11　かもしか川柳社

第一回川柳Ｚ賞・秀逸①

作品五十句より

青森県　村上陽子

振り向いた男と出逢う風ぐるま
北の窓から北の男が逢いにくる
あなたより少しやさしい風に逢う
情けを越える花子が越える風の芯
木綿針おとこを裏切りなどしない
ポチを裏切るさむい男を見てしまう
窓際の男は卑怯者になる
一抜けた一の傷みで石になる
さくらさくらだましおおせぬままさくら
川の向こうの風に溺れてゆく耳よ
じゃんけんぽんのグレーの軽さでさばかれる
さばき切れない風の傷みを掌に残す
ねんねんねむの木　母の傷みを越せぬ村
花影に仇討ちがある母の刻
霧が深くて風よおんなになれません
犯されて犯してしまう夜の樹々
抱いてください冬の証しがほしいのです
三味はじょんから女を囲い者にする
童話の好きな男とねむる冬が来る
別れは深く振り向きざまに雪が降る
夜笛鳩笛　許せぬ風のしたたりに
雪やんで永い誤解がとけました
少しみだらな風に抱かれる四月馬鹿
紙人形のいのちを抱いて紙になる
密告者になれる乳房がふたつある
風は無口でおんなのしずくから濡れる
濡れた玩具のしずくひとつをあたためる
証人のいない日傘の受胎かな
針千本の傷みを孕む火吹竹
陣痛やこの暗がりに火を放つ

第一回川柳Ｚ賞・秀逸②

伊予路五十句より

愛媛県　墨作二郎

ゆらんゆらんと　浮桟橋に転ぶみかん
鴉あそぶ　鳴呼と定住なき吾れに
一冊の絵本に昏れる　杳かな船台
海峡の底を歩いて　駱駝の地図
無数の手泳ぎ疲れて　老いたる河
国分寺跡　いちじくのやわらかし
空を一枚剥がす　牛乳瓶と老婆
道化師の妻　橋際で夜が明ける
かもめなきがら　港に届く青い傘
雑魚煮られ　風を駈けだす潮見水夫
潮流変幻　出城に唖の樹を哭かす
月天心　阿呆の顔で寝る一族
魚臭い道　遠景の縄ばしご
やりきれない斜面で　鎖錆びたいか
割箸がビッコいろいろ　サーカス小屋
風の日の棒稲架　留守に子が生まれる
耳に落葉　耳に海鳴り里程標
林檎剥いて以後　木の椅子にまだ逢えず
樹の巾で干す　背開きの痩せた鬼
日めくり焼いて　窓に一面海の襞
母に電話　冬菜の青をきざんでから
日時計に泣虫とまる　城下町
海鳴りの夜をつらぬけば　土偶ぼろぼろ
石段に落ち込む花瓶　波打際
春と書けずに　名刺の裏の一人部屋
海峡のたれかれ　切手みたいな雪
玉葱を剥く時　鳩は群れを出る
サロメ起伏で踊る　港のちりめんじゃこ
振子時計の雲は　瞼を泣き腫らす
放浪の雲　手品師は手を洗う

第一回川柳Ｚ賞・秀逸③

作品五十句より

石川県　細川聖夜

父の靴拭いてあしたに向けて置く
さびしさの分だけ増やす花の鉢
手を振ってこの子もいつか捨てる村
陽の当たる場所では死ねぬかたつむり
軋むのは水車と父の骨だろう
妻と打つ子の幸せを掛ける釘
いちまいの絵皿に愛を溶いて待つ
手花火をつないで過去を消してゆく
嫁がせて父の覚えたひとり酒
問いつめると造花もきっと散るだろう
哀しい話ばかりが溜まる象の耳
さくらまだ蕾のままに男の死
木の痛みを知るから妻を旅に出す
菜の花の黄に負けて読む歎異抄
首までの深さを渡る父として
ひとつ覚えの唄で漕ぎだす泥の舟
子のためにいくたび測る川の巾
恩人のひとりに妻の名をしるす
胸を病むおんなを置いて欠ける月
ひまわりを倒しひとつの喪に服す
別れ話にぷつぷつ切れる手打つそば
ひとりよがりの父の花火が開かない
哀しみを梳いて古びる母の櫛
寝たきりになった日に読む本を買う
石焼き芋はいつも情けを持ち歩く
じゃんけんに負けた男と年を越す
父の木がどっと倒れる冬景色
ガンで死ぬ話になって茶を替える
寡婦にした軍歌は聞かぬ母の耳
土砂降りを駈けてひとつの罪を消す

第一回川柳Ｚ賞・秀逸④

句集「男の紙芝居」より

青森県　北野岸柳

風の樹に五反六畝が吊るされる
雪原野無期懲役の陽が登る
北辺の鴉は阿呆とは鳴かぬ
日曜のアリアへ蒼きもの吹雪く
寒立馬ただ北へ向く性である
津軽三味やさしい人に味方する
祭笛胸毛ざわざわ生えてくる
花笠は発狂すべき北の夏
大太鼓ここより北は痩せ細る
送り絵に少年の笛泣きじゃくる
送り絵が淋しい明日はさぼろうか
祭以後の仕草を備考欄に干す
鳥獣戯画生まれたばかりの風光る
某月某日男としての風へ向く
風鈴屋が死んで風になるだろう
水換えて私が泳ぐ金魚鉢
脱走はもうあきらめた蟹の穴
先の世は役人だった蟹の泡
一間の窓に一間冬の空
冬ごもり百匹の駄馬春を待つ
冬は来た逃避旅行へ出かけよう
じゃっぱ汁胃に海がある雪が降る
独房へ逃がれてみても雪じんじん
角巻のポツリと紅い冬日暮れ
句読点ここから先の旗を縫う
雪明り別れてもいい語を選ぶ
過去がふと隣り合せに寝てるよな
ねちねち唄うねちねち聴いてるはやり唄
曇天にすとんと堕ちる無言劇
酔いどれてみれば男の紙芝居

第一回川柳Ｚ賞・佳作（50句より）

千葉県　普川素床

燃えるワルシャワ鯛焼きが手に重し
何かが倒れる雨の日の長い縄
巷にジャズ溢れ便器のかたちのいろいろ
長い風邪眼鏡を外し眼を外し
いらいらすると灰皿に居る老婆
忘れもののように電車線路を曲って来る
手のおかしさウイスキー瓶にウイスキー少し
殺意とは例えば山盛りのスパゲティ
空洞の陽と刺しちがえ止っている男
蜜は点々と文字盤の無い時計
眼を拒み通した壷の皮膚呼吸
棒立ちの影残しピエロ鏡に入る
とんだりはねたり四季ごとの眼の病い
一本杉頬をつねってばかりいる
バイオリン影の軽騎兵を射て
耳を澄ますとヒラヒラヒラヒラ皿の大群
秋に座るーうまく焼けない卵焼き
間抜けた顔の殺し屋がいる九月
大食漢ぶくぶく沈む記憶の薔薇
鏡ふくらむ秋の日のなつかしさ

第一回川柳Ｚ賞・佳作（50句より）

大阪府　天根夢草

あやまちのはじめふとんの端を踏む
本の名もいろいろあって春の川
いつまでも夢見ごこちの桃の花
二十年先のつくしのぼうやたち
人を尋ねていくたび渡る川の幅
警官にとがめられたらすでに負け
考えはいつでも甘い保証印
他人対他人　時候のご挨拶
手土産を買うおぞましき男たち
魚の背にたどりつきたい影法師
あすの朝までは続かぬゆびずもう
遠くまで行って戻った一輪車
しいたけのひだ白くあり酔わんかな
この箱はかぼちゃの種を入れる箱
犬になっかれて自信をとりもどす
世に悪事消えず大雨注意報
日の暮れをおそれおののく父なし子
花の木にもたれる母のない子供
和定食まだわたくしも日本人
有名になって死にたい雀の子

第一回川柳Ｚ賞・佳作（50句より）

東京都　菊地俊太郎

八月十五日から外れたままの顎
雷鳴の中のファミリーコンサート
水びたしのポストの中を見てしまった
けだるい川を遡る僕の打楽器
水没の悦楽を知るわがクルー
ローマ字を覚えてからの歯が脆い
くわえ煙草の毎朝のメーキャップ
腰痛に効いた一発の弔砲
飛び込み台の妻が映らぬ遠眼鏡
吸殻がどっと燃えだす僕の線路
賤しい酒を少年にこぼされる
研ぎ減ったナイフと歩くアスファルト
魚粉固めてわたくしの墓とせよ
マラソンコースに寝そべるかつての兵士
鉄棒に跳びつくまでのひとり言
キャベツふくらみ戦争を待っている
真白な日めくりを吐く精米機
大衆の単価をはじく蒼い指
端正な雲をいじめるオーケストラ
わが抽斗に横転の貨車があり

第一回川柳Ｚ賞・佳作（50句より）

青森県　柏葉みのる

十二月八日の冷めたスープ皿
大根がごろりと妻の留守をする
男を知らぬ清純な横顔だ
歌ガルタ一枚視野を放れない
氏素姓知れぬ花屋の花匂う
こっそりと後ろからくるにくい奴
嘱託に甘んじ回数券を購う
脇腹をつついて何の合図やら
長生きも考えものと思う日よ
手紙燃やして憎い人火葬する
苦闘する父を見ている鯉のぼり
灰皿がよごれてくれぬ虚しさよ
春うらら屋根の梯子を外される
大臣の名前を知った始球式
お互いの明日はわからぬ雨やどり
泣かれては困る肩には手をかけず
すこし角持つと人間ころばない
嫉妬する鼻香水を嗅きわける
歩行者天国政治の流れ替えられぬ
シンバルのたった一打に賭けている

第一回川柳Ｚ賞・佳作（50句より）

三重県　中村土龍

一匹の蝿が離れぬ垂れ乳房
水際の朝の鏡を叩き割る
花の首落目の父に絡みつく
血の果てへ落ちのびてゆく青りんご
春の星また海境を越えますか
落花茫々仮眠の椅子が一ツ空く
発つ人の優しさに敗け笛に敗け
暗闇へ絵馬かけに行く鬼夫婦
旅人に蹤かず離れず紙の蝶
少年の眸を降りてくる聖母の灯
枕一つ流れて暗い男の間
ビイナスの臍透きとおる帆前船
笑い袋よおい銭湯へ行かないか
十本の指から醒めて種を蒔く
軽い眩暈午後から空ラの小鳥籠
忽然と女が降りてくる梯子
雨の日の童話を詰めるブリキ缶
ふるさとの話に死んだ蝶一羽
絵草子の鬼と一と夜を睦み合う
巧妙に罠を脱け出す馬の首

第一回川柳Ｚ賞・佳作（句集より）

大阪府　山岸竜清

煙突はさむい話をかばい合う
白地図の鹿よりあつき屯田兵
敵に廻すにしても落葉は軽すぎる
百体の人形よりもひとつの死
少年の海より深いミサの列
モジリアニの貌の長さに秋がある
母が守りしは塩壷の中の天
落椿　母のうしろに降らせる雪
母の受話器のうすい泪に旅立ちぬ
美濃紙を買う母ありき　透明に
白湯を飲む　繭のかたちに母の背は
母に返す愛幾条の埋立地
月光や　あどけなかりし母の眉
追い風に打たせて母の駅つづく
鎮静剤の限界線に母が居る
もう殖えぬ歯を洗ってる　母ひとり
母から女が消えると見える山脈よ
折れやすい聖樹を数え家族を数え
ふり向けば父　鬼の子も風の子も
狂いなく赤いボールを子は握る

第一回川柳Z賞・佳作（50句より）

青森県　吉田　ちか子

冬浅し今を逃せばななかまど
春やむかし受胎告知の船が出た
風疼く小銭を捜すポケットの曲線
余生かな嫂と聞くもがり笛
やすやすと暗示にかかるしずり雪
ななかまど雪消えるまで負け戦
楢山やカンナ溺愛してやまず
雪しまき芝居がかって旗かつぐ
雪止まぬ針を光らせ鋏を愛し
雪のんのん首落ちやすき窓あかり
指きりの冬の限りを眸の底に
三角の冬果つるまで紙人形
真冬日の花が氷ってガラス一面
雪ふって降って埋まらぬ逆縁で
埋ずもれて生活の匂い誰に合掌
真冬日の電話反語は眠れない
地吹雪の表通るは異邦人
雪中のたった一人へ御用きき
雪しとど昔語りの金屏風
雪ひかる聖なるものへ一歩でも

第一回川柳Z賞・佳作（50句より）

愛知県　神谷　三八郎

眉を落した旅の果てなる身づくろい
一夜明けたら紺屋の嫁になりきるか
動かぬ雲が口を割らない或る情事
橋渡る片足づつの懸念かな
シルクハットが迷惑してる種あかし
案の定男の欲しい種あかし
邪魔者ついでに立喰いそばへ顔を出す
酒屋には一応無職として届け
からゆきさんと書けばこと足る便り
昨日につづいて聖書を見てる碌でなし
愚で果てるならそれもよし五目飯
今日も一人で銭湯へ行く白いタオル
相討ちと相成り候パチンコ屋の真昼
風は地を離れもせずに哭いている
いろは順に朝湯から出る喜劇かな
ほンの少し後で倒れたおんな独楽
蓋が欠けてて芋ころの煮えがよい
盆に盛ると少しは喋る青リンゴ
油地獄の泣き声を聞く朱の桟敷
誰が責めても白状をせぬ縄梯子

第一回川柳Z賞・佳作（50句より）

岩手県　佐藤　岳俊

錆び農具ひきずり歩く開墾地
北風も吸いこんでいく妊婦服
埴輪の目のぞけば母乳満ちてくる
シベリアの風突き刺さり凍み大根
農夫逝く休田ふかく灰盛られ
彼岸花いっぽん飢えの血がはじけ
血管を流れ怒りの死票燃え
声かぎりさけぶ田螺と農の墓
憎まれて実る小さい種子を蒔き
たたき割る因習そして泣きはらす
豚の胃で安保条約まるまると
暁の荒野とかたる血はしずか
休田に死票の怒り積んでいく
逆吊りの豚の悲鳴をきいてくれ
為政者へ寡黙つらぬく泥落穂
吹雪く夜みごもり歩く雪おんな
闇に闇重なり根雪だけ積もり
葬列も白く荒野へ消えていく
藁灰に骨もとかして農夫逝く
長靴を洗う両手の隙だらけ

第一回川柳Z賞・佳作（50句より）

東京都　山本　忠次郎

鳩時計たて続けには殺せまい
日がむすっとして不意に死魚が浮く
爪先に集ってくる鬱の虫
鏡の中に入って行く彰の列
軍隊が来て蝋燭を消して行く
親切な床屋が急に怖くなる
長い滴りびしょ濡れの天使達
ロボットと走るよ口を尖らせて
鍛冶屋から陽気な火花を貰って駆け
父の綺麗な抜け殻に兜脱ぐ
新しいテーマが好きな挽き肉屋
徳利の尻が冷えてるバッハかな
逸早く迷路を抜けたのは醜女
弁護士のふところ深く揚げ花火
新しい枯木がはしゃぎ過ぎないか
ぼうふらのバトンタッチは淋しいな
ドアを押す力を溜めている案山子
佇ち止ると血なまぐさい冬帽子
眼鏡はずしてどろんと女になる
くらがりの椅子に太り過ぎの黒子

第一次通過作品十句抄（佳作以上除く）

宮城県　渡辺　一寸

四枚の絵を持ってくる窓の風
人情のふところ深い柿の色
核ありて夕焼雲を信じない
風景と対話パズルの帯を解く
渋滞に押しつぶされる少数派
シナリオを書く安眠の白い紙
自画像の髭から落ちる星の屑
先取りの丘に咲いてる銭の花
休息に絶景がない母の道
禿山に雑木を植えて理想論

埼玉県　須田　尚美

望郷の念にかられる薬箱
荒縄で括って捨てる過去いくつ
傘たたむそんな思いの会者定離
生きざまという哀しみを皿に盛る
左遷するカバンの中の雪崩かな
掌に矛盾と書いて歩き出す
海鳴りやノラになりたい紙の鏃
野火走る父の背中の紙芝居
血の川をざぶざぶ渡る定期券
傷口に止まった蝶を考える

山口県　中村　卓民

太陽に背く日眉毛剃り落す
蒸発対面もう母親でないドラマ
別れねばならぬ土踏まずが掻ゆい
太陽の死角で無精卵孵る
一枚のハガキに決意迫られる
灰皿の底の孤独な男たち
ビックリ箱の底に女が一人棲み
昔むかし月に兎がいた絵本
汗知らぬ指で乳房に触れたがり
十字架が怖くて魔女になり切れぬ

東京都　吉岡　宵波

森に降る雪こそ白し暖かし
成人の森に落ちこぼれはいない
森の主張に二十才の声は萌黄なり
正月の森出稼ぎの足を抜く
冬の森帰らぬ独身坊主かな
犬の仮説の森に小判を掘りに行く
二十世紀森の向うは砂嵐
春愁の森に帰ったチンドンヤ
幾度か四月の森を通り抜け
エプリールフール森の梢に吊っておく

明日からの道の重さの賞をうけ　**山形県　井熊玲月**

幸運の磁気を招いた汗のあと
迷彩の中で本音が溺死する
編み棒の先から母の鈴がなる
糸電話母子を結ぶ愛の詩
騙し絵を生涯信じ妻の道
男児誕生父となる日のトランポリン
こぼれ種こぼれたとこに陽の恵み
指切りが愛の前奏曲となる
燃える肌不倫の戯画を抱いている　**福岡県　野田伸吾**

水ぬるむ姉の病床陽のとどく
姉の瞳に一会の水の澄みきって
水かげろう姉の真白き夏帽子
水掬う姉のてのひら少女のままに
川の水　姉来て泣く日さざめけり
他国にある姉恋うて回る水車
白椿　姉は他国の水買いに
水まくらおぼろおぼろに姉のかお
水の音浅き夢みる昼　真昼
水のかたちの刻々変わる　花ざんげ
脳波ゆらゆら階段のぼる業ばかり　**新潟県　藤井比呂夢**

太陽を掌にとる安楽死のリフト
敵かも知れずえくぼはいつも二つある
生きてきた月日に塩ふる石仏たち
いちまいの皮膚を脱げずに倫理焚く
五百円硬貨民話が酔いつぶれ
男も罪も正直に泣く修羅阿修羅
とおりゃんせ一会の深さかぞえる日
てのひらの漫画を売って這いあがる
鋭角の傷もちゼニ袋の乞食　**北海道　嘉瀬信柳詩**

弾まない毬の哀しき貌と会う
水の鈴火の鈴瞽女に旅つづく
肋骨に冬を吊して瞽女の旅
折鶴の泪を見たを悔いている
白いまま墜ちてゆく日の冬花火
蛇口よりポトリと落ちし私小説
縄梯子切られ休日寒くなる
パン乾き切ってる寒い風景画
振り向いた距離を未完の童話とす
野苺よ優しき不倫などいかが　**山形県　片倉沢心**

衣食住足りて心の底の飢え
下積の舌は乾いてばかりいる
戦争と平和乳房が二つある
酔いさめて愈々傷が深くなる
農政の谷間にたぎる一揆の血
と金にはなれず終った父の皺
履歴書と男が泳ぐ時化の海
折返し点で人間臭くなる
難民のテレビ見ているパンの耳
単身赴任妻の知らない私小説

○　○　○

※前号に、第一回川柳Z賞の正賞・準賞の入賞作品を発表したところ、秀逸・佳作などの各五十句のうちの一部でもいいから、発表して欲しいとの要望がありましたので、秀逸各三十句、佳作各二十句、その他の、第一次選考委員の眼に止まった作品各十句を遅撒きながら掲載しました。

○　○　○

誤植Gメン　前号1頁下段、泉淳夫推せん⑤**山岸竜清**。4頁「花びらがひらひら舞う**は**木の情け」大破。「むこう岸を歩いていっ**た**父の傘」大破。11頁得点**4**竜清　1理川は削除20頁21頁「ポケットの**獏**の尻尾が風化する」寄生木。表紙3、第二回作品募集、昭和五十八年以降の作品。

「川柳でんでん太鼓」について

田辺聖子

野沢省悟

古川柳はともかく、現代川柳を川柳界以外の眼から見た文章にはほとんどお目にかかったことがない。ところが、それがあったのである。

過日、ある知人と川柳の話しになり、「田辺聖子の古川柳おちぼひろい」の文庫本を書店で見つけて読んでいるんだけども、わかりやすくて面白い——と話すと。その人なら現代川柳についても書いているよ、真正面から取り組んでいて面白く読める。とのことで、それは何の本ですかと聞くと、小説現代だという。もう知っておられる方は大勢居ると思うが、僕には初耳だった。さっそく書店に行ってさがしてみた。あった。

小説現代十一月号で目次欄を開くと、川柳でんでん太鼓（大評判・第二回）と書いてある。第二回ということは第一回があり、今後もつづいて行くということであろう。

少し紹介して見る。

まず現代川柳に対して次のような文章が見られる。『川柳には、人情世態の機微をうがって、思わずオトナを「タハハハ……」と笑わせる「タハハ川柳」と、一読して「うーん」と唸らせる「うーん川柳」とある』と書いて、時実新子の句集「新子」を紹介しつつ『古川柳の句のようなおかしみとは別に、文学的ショックを与えられる作品である（中略）ほんとに難解でワケのわからない句であれば、それは純文学でも何でもない。タダの道楽である。しかし新子さんの句は読んでいると、鮮明な印象の川柳風土を開拓していることがわかって来て、だんだん面白くなること請合いである』と書いて句の難解性に対してもまっすぐな一線を引いて見せてくれている。

次いで、詩川柳の簡単な歴史と、川上三太郎のその歴史における二刀流の立場を紹介。三太郎の「河童満月・七句」を「うーん川柳」であると言い、その一句

河童起ちあがると青い雫する

を次の様に評している。『ぶるっと震えるような句である。いや、これはいかさま、俳句の境地ではない。枯淡も侘びもない。詩情は匂うが、しかし俗臭も匂い、そのかねあいがまことに口あたりよく美味しい。そのへんが川柳の所以』。また新子の

熱高し相姦の藻の汚れ髪

を評して『この句から、もわーっとこもる女の髪の、熱にむれた匂いを感じるではないか。そこに不倫のイメージがあり、秘薬の愉悦が教唆されている。世俗の退屈なコトバの代りに、濃密な官能の緘黙がある。髪の汚れさへ官能的である。いとわしきおどろの藻の髪は身心をまどわす嫋々たる膠となって粘りつく。言葉が注意ぶかくえらばれているので、耳で聞いてもわかりやすい（中略）これは女の強さ、快楽に貪欲な、そして、男たちのあとへまでも生きのこる女のしたたかさを暗示する、力ありあまった句のように私には思える』

以上、簡単に紹介したが、現代川柳を真正面から取り組んでくれている力が文章に感じられ、思わず川柳を創っている一人として襟を正したくなるような思いがする。まだこれからもつづくと思われる。次号が楽しみである。ゼヒ一読をおすすめしたい。